祈りのかたち What's New?

能の舞・バッハ「シャコンヌ」・チェンバロの融合

日時：2023/6/17/sat.　16:30開演（16:00開場）

場所：梅若能楽学院会館 Umewaka Noh Theatre

～プログラム～

●ヴァイオリン独奏　斎藤アンジュ玉藻

バッハ：無伴奏パルティータ第1番より　「アルマンダ」

人間は様々な苦しみに襲われるがバッハは決してそれから逃げようとしない。静かな期待と勇気の先に希望が見えてくる。自然に救いの世界に導かれた魂についての賛辞とも思えることばでこの曲は終わる。

●ヴァイオリン・チェンバロ　斎藤アンジュ玉藻　中村真理

ヘンデル：ヴァイオリンソナタ第4番より

暖かい日差しを思わせるこの曲は王宮にも長く務めたヘンデルのやさしさと品位に溢れる。

●能舞　ヴァイオリン・チェンバロ　梅若紀彰　梅若英寿　梅若慎太朗　斎藤アンジュ玉藻　中村真理

タルティーニ：悪魔のトリル　梅若紀彰：作舞・演出

バッハとほぼ同年代のイタリアの作曲家であるタルティーニは大変な苦難の中この曲を書き上げた。夢の中に出てきた悪魔がこの曲を教えてくれたという。あまりに技巧的に難しいので悪魔との闘いのような日常から離れた練習が必要とされる。
シチリア風な美しいメロディーから始まるこの曲は悪魔に心を奪われそうになった人間の葛藤であろうか。美しいカソリックの教会で苦しみを訴え、救いを求め、それでも悪魔は襲い掛かる。今でもイタリアには絢爛豪華・・なカソリック教会の中、祈りをささげる人々が後を絶たない。

休憩　20分

●ヴァイオリン・チェンバロ　斎藤アンジュ玉藻　中村真理

モーツァルト：幻想曲ニ短調より

あまり短調の曲を書かないモーツァルトの中で珍しい短調の曲である。しかしモーツァルトの書いた短調の曲は暗い心情を超えている。ひたすら美の世界を描くのがモーツァルトの真髄。決して濁った音はたてない。ヴィブラート奏法（音程を上下に揺らす奏法）も独特である。音程幅は少なく元の音程より高い方に広く、低い方には垂れ下がらない。人々に語りかけるというより神との対話に一緒に加わる事ができると思える。

●能舞　ヴァイオリン　梅若紀彰　斎藤アンジュ玉藻

バッハ：シャコンヌ　梅若紀彰：作舞・演出

この曲はヴァイオリンを弾く者にとってバイブルのようなものである。この曲は宇宙を描いているとも言われている。全体に常に レ-ド・シ・ラ という低音の動きの上に当時としては考えられないほどの音を散りばめて哲学的に曲は進む。
タルティーニはカソリックのイタリアで、バッハはプロテスタントの東ドイツで同時代に音楽の大発展を遂げていたのである。
バッハが働いていたライプツィッヒのニコライ教会でこれを演奏した時の印象は大理石の建物の高い天井近くで俗に天使の声と言われる音が舞うのを感じた。神の存在を示すこの言葉こそバッハなのか、と思えた。この度の日本の美しい木造りの能楽堂は全く違う美しさが身を包む。
暖かく優しくしかも力強さを備えたこの響きは能楽堂そのものが楽器となり会場が一つになって感動に包まれる。今回は日本ならではの「新しいいのりのかたち」という創造を試みる。
曲のちょうど中ほどに急に静けさが訪れる。そこに演者たちの平和への祈りが結集する。
最後の音は長調でも短調でもないレの単音（ニの音）；「無」。数学的に解いても小節数は「無」に終わる。